

令和元年度「不登校に関する研修会」(第2回) 講義記録

- 1 日 時 令和元年8月29日(木) 10:15~12:00
- 2 会 場 姫路市市民会館
- 3 講 師 神戸市療育センター・診療所長(小児科・小児神経専門医) 高田 哲 氏
- 4 テーマ 神経発達症と不登校 ～ライフステージに応じた支援～
- 5 内 容
- (1) 療育とは
 - ・ 子どもの持つ長所を最大限に伸ばすことを目指して、治療をしながら教育することである。
 - (2) 子どもの発達を促すには
 - ・ 子どもは遊びや模倣の中から新たな機能を獲得し、獲得した能力を基礎としてさらに進歩、発展する。また、年齢とともに新たな能力が獲得されることから、同年齢、異年齢集団とのかかわりが大切である。
 - ・ 家族にとって、子どもの将来の見通し、気持ちを共有できる仲間及び神経発達症の基本的な知識が必要である。
 - (3) 神経発達症 (Neurodevelopmental disorder) とは
 - ・ 大脳高次機能(人間特有の高度の認知機能)の非進行性の障害が発達期に生じたものである。
 - ・ ものごとを理解したり、判断したり、記憶したり、推論したり、思考したりする高次機能の障害である。
 - (4) DSM-5による自閉スペクトラム症(以下ASD)の診断基準について
 - ・ 対人的コミュニケーション、相互作用の障害(①対人的情緒的操作の障害、②対人相互的な非言語的コミュニケーションの障害、③状況にあった関係作りの障害)があり、限局された反復する行動や興味(①常同的または反復的な運動性の行動、物体の使用または発言、②同一性へのこだわり、ルーチンへの頑固な固執または言語的または非言語的な行動の儀式化された様式、③著しく限局された興味、④感覚過敏への反応が亢進、低下、または環境における感覚面での通常でない関心、より少なくとも2つを満たす)がみられるもの。
 - ・ 多くの発達上の課題が共存しているうえ、年齢によって子どもの特徴が変化するため、評価が難しい。
 - (5) SOULとは
 - ・ 子どもとかかわる時の基本的な姿勢で、Silence(静かに見守る)、Observation(よく観察する)、Understanding(深く理解すること)Listening(耳を傾けること)のことである。
 - ・ 言葉はコミュニケーションのための一つの道具であり、非言語的なコミュニケーションを含めて、人と人との相互の関係性を育むという視点が重要である。
 - (6) 睡眠と発達について
 - ・ ASDの子どもによくみられる随伴症状に睡眠障害がある。
 - ・ 睡眠不足だと、気分が滅入る、仲間との交流が少なくなる、攻撃的になる、衝動的になるなどの症状がみられるようになる。
 - ・ 早寝早起き、昼間の運動、朝食の摂取などの規則正しい生活が大切。
 - (7) 感覚過敏について
 - ・ 運動会のピストルの音やざわざわした環境を嫌がる(耳ふさぎ行動)。
 - ・ 特定の音により、嫌な思い出がフラッシュバックされることもある。

- ・ 光や動きによる刺激を受けやすく、テレビやスマホに強く魅力を感じる。
- (8) 発達支援教室について
- ・ 「ぼっとらっく」は、就学前の発達が気になる子どもと家族のための教室で、保護者が発達障害について学ぶ「講習会プログラム」と、学生・保育士・保健師・地域ボランティアの託児による「子どもプログラム」を実施している。
 - ・ 家族同士や講師、保育士、民生委員、ボランティア学生との交流を定期的に行うことにより、家族が孤立せずに正しい情報を得ることができ、焦燥感の軽減や現状への冷静な判断に繋がっている。
 - ・ 「子どもプログラム」では、遊びの時間を区切る、遊びの種類に応じて場所を区切る、強要はしない、終了前にクールダウンプログラムを行うなど、子どもの特性に応じた支援を行っている。
- (9) ASD の子どもが不登校になりやすい理由
- ・ 同年代の子と興味の対象が異なる。
 - ・ 教室や遊びのルールに従うことが難しい。
 - ・ 感覚過敏のため、教室に入りづらい。
 - ・ 協調運動が下手でいじめの対象になりやすい。
 - ・ 睡眠リズムの問題、家族関係の問題 等。
- (10) 神経発達症のある子に関して教職員が配慮すべきこと
- ・ 家族の状況を知り、家族全体を支援する。
 - ・ 家庭での過ごし方、特に睡眠状況について十分把握する。
 - ・ 感覚過敏がある場合は、避ける手立てを考える。
 - ・ 他者（特に同年代の子ども）の近くにいると脅威を感じる可能性があることを理解する。
 - ・ 子どもが一人でいることを認め、その時間を保証する。
 - ・ 集団行動の活動予定、内容をあらかじめ伝えておく。
 - ・ 子どもが好きなものと嫌いなものを見極め、活動計画を立てる際に配慮する。
 - ・ 初めての人との交流が苦手なため、職員の交替などで子どもを混乱させないようにする。
- (11) 思春期・青年期発達支援事業について
- ・ 神戸市保健福祉局発達障害者支援センターとともに、「思春期・青年期発達支援事業」を行っている。
 - ・ 「Be・ユース」では、個別に作業療法士がサポートして、各自の特徴と向き合いながら具体的な目標を立て、その目標に向かって様々な活動を行っており、「思春期発達相談室『あっとらんど』」では、臨床心理士が面談により、本人や保護者の相談を受けている。
 - ・ 「自立できる能力」とは、一人で何もかもができることではなく、自分の長所、短所をよく理解し、時に応じて他の人に応援を求めたり、専門家の意見に従って服薬できたりするスキルである。
- (12) 発達支援に求められる要因
- ・ 発達支援に必要なものは、親・家族支援、育児支援、子どもをとりまく多くの機関のネットワーク構築（横の連携）、ライフステージに応じた継続した支援（縦の連携）である。